

小説
響ひびき

水野 仙子

（一）

藤村の羊羹、岡野の栗饅頭、それから臺灣喫茶店の落花生など、あの人の心盡しの数々が、一つく包みの中から取出されつゝあつた。――私はゴム枕に片頬をつけたまゝ、黙つてお蔭が鋏刀はさみをもつて糸を切るのから、その糸を丹念にくるくると指の先に巻いて、薄紫と赤と青との切手の貼られた送票を丁寧に剥がしたりしてゐるのを、もどかしく眺めて

ゐた。けれどもそのもどかしさに何ともいへぬ楽しさがあるのを思つて、私は急かずにぢいつと堪へてお蔭の手許をみつめてゐた。書簡箋、小形の封筒、そんなものを順々にお蔭が私の枕許に並べたてた。その時、それらのものゝ間に隠れるやうに挟まつてゐた、オレンジ色の表紙を持つたこの小さな手帖を、私はふと手をのべて自分の蒲團の上に取つたのであつた。片手の指先でパラ／＼と繰ると、弾力のある紙は大急ぎで優しい薄桃色の線を綾に亂して

伏せて行つた。私は何となくこの手帖が氣に入つてしまつた。そして直ぐに萬年筆の鞘をぬいて、そのオレンジ色のおもてに『響』と題を打つたのであつた。けれどもそれは、別にどうといふ意味を持たせた積りではなかつた。たゞその時、左を下にして横^{よこた}はつてゐた私の心臓の音が、とツとツとツと靜かに枕に響いてゐたのを、ふとそのまゝ紙の表に印象させたまでの事であつた。

けれども、私は別にこれぞといつてこゝに書かなければならぬ事を持つてゐるのではない。毎日々々、或は瞬間に、或は可なり長い間連續して、さまざまに思ひは私の心を過ぎてゆく。それらが或は歌といはれるものゝ形ちを取る事もあれば、詩ともいふべきリズムを持つた獨り言である場合もある。けれども敢てそれらを書きとめて置いて私の何になるだらう？やがては消えてゆくべき命であり、姿であるものを……私の心臓の響がはたと絶えた時、最もよ

くそのすべての意味を語るものは、何も書かずに殘されたこの白紙であるであらうよ！すべてを書き残すにしては、餘りにこの思ひが多過ぎる……

さらば愛も憎みも悩みも苦しみもよ、今暫くが間であらうほどに、私の胸が張り裂けるまでは、お前達の棲家として私はこの心臓を提供する。それらのものが、私のものとしてこの世にある間のしるしは日毎夜毎に枕を傳うて我と我が耳に入る、あゝこの響である……とツとツとツ……

（かう、序のやうなものが、その手帖のはじめに書かれてあつた。それは昨年の秋の頃、廿七で死んで行つた或る人妻の、たつた一つの遺稿……ともいふべきものであつた。彼女は生前相當な文筆を持つてゐたのであつたのに、自分の病が到底起つ事が出来ないのを知つてからは、時たま極めて僅かな人達の間にかく手紙以外には、決してものを書かなかつ

た。それは書く事がなかつたのでも、又書きたくな
いからでもなかつたのだと私は……（作者）思つてゐ
る。それは書きたくて書きたくて仕方がなかつたか
らこそ、その願ひが餘りに強く餘りに大きかつたか
らこそ、彼女は書かなかつたのだと私は思つてゐ
る。書き残すほどのものならば、書いてく書きぬ
きたい、けれどもそれにしては、彼女の息はそれに
伴ひ續かなかつた。その爲めに、最初のうちは彼女
は頻りに悶え苦しんだ。けれども、それは苦しめば
苦しむほど、却つて悩みばかりがありく残され
てゆくのを悟つてからは、ふつつりと思ひ諦めたや
うに、彼女は絶えてものを書き綴るといふ事がなか
つた。さうしてその折々に浮んで来るさまざまと思
ひを、その折々の去來にまかして、語る人もない故
郷の寂しい田舎で、堅く口を結んで一年餘り年月を
送つたのであつた。この『響』はその間に書かれた
ものらしく、日記や其他の書き反古は生前にすべて

焼かせてしまつたとかで、これだけがやつと其枕許
から發見されたのであつた。それは大方みな白紙で
あつた。それは彼女の日記でもあれば、又感想録で
もあるところの、意味の深い白紙であつた。私がそ
の夫なる人と共にこの手帖をひらいて見た時、めく
つてもく出て来る白紙は、却てあの終りに近い頃
の沈黙と微笑とを、それからそれを獲るまでの長い
長い間の苦悶と葛藤とを、最もよく雄辯に語つてゐ
るとしか思はれなかつた。たゞこの手帖のお終ひの
方に、恰あたかも何かの例外のやうに、次に録するやうな
ものが全文書き込まれてあつた。それは彼女の從姉
へと書かれたものであつた。それを見ると、現代の
相當な教育を受けた或る年輩の女の、妻の、さうし
て死といふものを凝視みつめてゐる人の、或る心持ちが
しみくわかるやうに思へるのである……）

ふるさとに雪埋れて病む吾を愛でゝさびしくかへりゆきし君はも。

寂しさはいつもあの人の後姿に残る。そのマン
トの肩といはず裾といはずに、雪は亂れくゞてあと
を追うたであらう、見送る事も叶はなくて、いつば
いに開いた瞳を硝子戸の外に置いてみると、雪は狂
ふやうに降りしきつてゐたつけ、その日は早くも先
へ先へと流れて行つてしまつた。

今夜は、いつもあの人が見えて歸つた後暫くの、
寂しい落着きの氣持ちのうちにゐる。病氣以來の並
並ならぬ^{いた}ぬはりを思ふにつけ、我儘ばかりしてゐた
昔の苦しい記憶をのみ残して、何の酬^うゆるところも
なく離れて行かなければならぬのが濟まなく、佗び
しい。けれども考へてもくゞ、すべては考へ切れな
い、それは考へ盡したも同じ事なのだ。にも係^{かは}らず
その癖私はやつぱりいろんな事を考へてゐる。それ
はやがて來る嚴^{おごそ}かなるものゝ前に、如何に造作なく

崩れ去るものであらうとも、いろく々な色に塗られ
た積木を、弄ぶとは知らずに幼い建築を企てる子供
のやうに、私はやつぱりとかくこの胸に不思議な様
な樓閣を築いたりしてゐる。寂しければ寂しい様
に、悲しければ悲しい姿に……。

この頃ふとある考が私の心を捉へて放さない。そ
れも不思議な樓閣に棲むやうなものゝ一つである
かも知れないけれど、ともかく私の心はその考へに
促がされて止まない故に私は靜かに百合^{ゆり}さんにそ
れを書いて置かうと思ふ。

百合さん。

この手紙が他日私の亡いあと貴女^{あなた}のお目に觸れ
る事があつても、どうか死者に對した時にあり勝の
あらたまつた心持ちや、何となく感じるものである
義務の念やに支配されずに、どうか自然な心持ちで、
まだ生きて丈夫である私のたよりの一つだと思つ

て読んで下さい。それでないと却て、私があなたに

お話ししようとする心持ちが、その自然さを失つて、

この手紙の命を失つてしまふ事になりますから。

そして百合さん、假令たとへこの手紙が書置きしづの形式を

なすとしても、敢て告別の言葉をこゝにくだぐし

く書き残しますまいね、それはたゞ後に残つた人の

情緒をそゝつて、徒らな悲しみを湧きたゞせるに過

ぎませんから。お別れなら多分もつとその適當し

た場合にする事が出来ませう、多分恐らくもう一度

は、あなたにもお目にかゝれる事が出来ると思ひま

すから。よしや又私の終りが意外に早く突然に來

て、あなたにも誰にもお目にかゝられなかつたとし

ても、私の冷たくなつた脣くちびるは、其時却て最も確かに

左様ならを語るでせう、何故ならば、それが一番最

後のほんとの左様なからです。私はあの二度目の

咯血以來といふもの、毎日世と人に向つて一つづ

つ左様ならを繰り返して來ました。今も毎日心から

眞面目にそれを繰り返してゐます。

私の用意はもう既に成つてゐます。どうしてもか

うしも避けられない爲めに、せめては慌てないまで

に整へなければならぬその用意が。けれどもあの捕

捉すべからざるもの――それは死の姿――が、最早

や、私を苦しめはしないけれども、絶えず私の身邊

に漂たひよつて、一生懸命にその姿をはつきり掴まうと凝

視つめてゐる私を悩まし疲らせてゐます。私の眼はも

う地には向いてゐません、たゞひたすらにあの、

覗かうとすれば隠れ、掴まうとすれば消えて行く姿

に向つていつぱいに目を見ひらいてゐます。もう其

處こより外に私の目の向けどころはないのです。そし

て一步一步それに向つて近づいて行くに従つて、不

思議にも心の苦痛や悩みは一步づゝ後戻りをして

ゆきます。依然として私を招ぐ姿は暗く朧おぼろではあ

るけれども、私の心は決してそれを厭ふところか、

或る懷しみをすら持つて迎へ、又手をのべてゐます。

美しき幻影を冷たい現實の墓場に葬る事の悲しさに泣いた心は、もう古い脱殻ぬけがらのやうに、私の心の片隅に押寄せられてひたすらに眞實を見ようとする願ひに胸を抱いてゐます、極めて柔順に、極めて謙遜に。そしてその眞實は、今の私に取つてはどうしても、間もなく私の爲めに來る死と結び合つて離す事が出来なくなつてゐます。それ故今私がどんなに澤山の涙を流してゐようと、最早やその涙は私の悲しみや苦しみを表はすものではなくなつてゐます。それは名づける事の出来ぬ、自然な、たゞ靜かに流れる涙です。

けれども百合さん、かうしてもう自分自身のために泣く必要のなくなつた私も、殘されたものゝ悲哀を思ふ時には、まだくやつぱりこの二つの眼に堪へ切れぬ熱い涙がこぼれます。それは月日と共に薄れゆき、いつかは忘れ去られるものではあつても、死んで行くといふ事が私一人の出來事にとゞまら

ずに、多少に係らず、或は一時にもせよ、ある打撃を人の上に残して行かなければならないといふ事は、私に取つてはほんとに辛く苦しい事です。

(三)

死別の哀苦は、逝くものよりも、感じやすいこと共に残るものゝ方がどんなにか強く生々しいことであらう、あなたはよくそれを知つてらつしやるのですね。私は覺えてゐます、あの時のあなたのあの激しい嗚咽を……。それはもう、まだつい此間のやうだけれどもう三年にもなりますね。弘一さんの靜かな體むくろを納めた寢棺ねぐわんで、焼場へと行くためにあの鎌倉の家の門を出たのは、氣の短い冬の日が、一秒の猶豫もなしにさつさと暮れて行つた頃で、世話人の振翳ふりかざす提灯ちやうちんの灯影で、漸く人々の顔がそれと分るやうな時でした。ぎし／＼と重々しい、けれども寂しい音をたて、白木の棺は私の車の脇をすれ／＼に

通つて先の方へ行きました。幾臺もの車が置かれた順序なりにそれに續かうとすると、『どうぞ御縁の近い方からお先に願ひます、御縁の近いお方は前の方にいらして下さい。』と葬儀屋の男が呼んでゐるので、車は暫く車上の人の指圖のまゝに入り亂れました。亡き人の妻の從妹いとことしての私は、血筋をひいたと思はれる人々の後に遠慮深く車を入れさせて、靜々と動いて行く行列に續きました。振返つても見なかつたけれど、氣配けはひではもう二臺ばかりが私のあとに續いてるやうでした。私はあなたがどのへんにいらしたのか――恐らく棺のすぐあとに従つたのでしたでせうけれど――少しも知りませんでした。私はなるべくあなたと顔を眞面目にむき合せるのを避けてゐました。あなたの眼を見る事が私には辛かつたのです。あなたの眼は私の涙を誘ひ、私の涙はあなたが一生懸命に支へてゐる涙の堰せきを危くするだらうと恐れたのでした。私は人知れず多

勢ぜいの中から、絶えずあなたの姿を求め又追うてゐました。あの可なり複雑した親戚關係の人達に圍繞みづらされて、あなたは實に雄々しく、僅かな事にも氣を配つて亡き人の遺志のために戦ひながら立派に振舞つてゐました。その取亂さない姿が私には一層悲しく可哀いさうに見えました。私は初めから終ひまで車の上で泣き通しでした。何故こんなに泣くのだらうと自分で自分を怪しむ程、泣けて／＼仕方がありませんでした。それはあなたに對する同情と同感とが、人事ひとことならずひし／＼と感ぜられたからで、私に取つては半分はもう自分の打撃であり悲しさであつたのでした。やがては自分にもかうした境遇がめぐつて來るのだといふ考へが、どうしてもこびりついたやうに頭から離れないで――今から考へると可笑しいやうだけれど、あの頃はAが悪かつた時分でせう、そして私は元氣でぴん／＼してたのですから、私はすっかり自分が殘されるものだとばかり

思ひ込んでゐたのでした——もう既に其時が來たのでもあるかのやうに、あなたの哀痛と私のそれとが一緒くたになつて、又その癖百合さんが可哀いさうだく——と始終胸の中で呟きながら、闇の夜の車の上で誰にも顔を見られないのを幸ひ、ひた流しに涙を流しながら運ばれてゆきました。一生のうちで：ともう言つても差支へないでせう、あんなに泣いたのは、お父さんお母さんの失くなつた時とあの時とだけで、あの時はお父さんお母さんの時よりも、もつとく泣いた位に私は記憶してゐます、それはそれだけ私達が大人になつて、いろく憂き苦しみを實際に知つて來たからなのでせう。

かうしてあの暗い野道を、車夫達は掛聲から掛聲を送りながら、あの暗い險しい寂しい火葬場のある山の下に着きました。私達は其處からみな徒歩になつて、朧ろな弓張提灯の導くのを頼りに、足許あしもとに氣を奪とられながら、揉まれく——てのぼつて行く棺のあ

とに續きました。あゝ何といふはつきりとした記憶でせう、あの寂しい恐ろしい夜の光景は——。

太々しい怖い顔の隠坊おんぼうから火室ひむろの鍵を受取つて、それでもあなたは猶念に念を入れて改めるやうに、その實は離れ難がたなく、弓張提灯を振翳ふりかざして、あの氣味のわるい火室のぐるりを一週しました。現在その手で口火をつけて、現在その手で夫の遺骸を焼くその焰ほのほの音が、煉瓦れんぐわに圍かこまれた不思議な世界の中に、耳そばだを欽さてるまでもなくはつきりと聞えてゐました。生と死との歴然とした區別が、煉瓦一重の中と外とにありました。死の方は暖かく、生の方は冷たく暗かつたのです。鐵てつの扉を固く閉しざれて、中の灯影が糸よりも細くちら／＼と洩れてゐました——何と思つたかあなたはぴたりと扉の前に立ちどまつて、既に下された錠に手を掛けてそれをゆすりました——『大丈夫ですよ奥様、鍵はこのとほりこちらで預りましたんですから、明日お骨上げにおいでにな

るまでは誰だつて開ける事が出来ません、それにこの人が一晩寝ないで番をするんですから……。』と、こゝまでも蹤ついて來た葬儀屋の男が、時に心付けといふ意味をふくめて言つた時、あなたがどんな氣がなすつたか私はよく知つてゐます。それなのに人々はもう先刻さつぎから外に出てあなたを待つてゐました。さあと促されて、一步片足があゝの火屋しきやの閤しきやの外に出た時、『わッ！』といつてあなたは突然體を二つに折つてしまひました。とう／＼悲みの極みで堤が切れてしまつたのでしたね。その刹那あなたの程近ちかくにゐた私は、いきなり自分も共にわつとなつてあなたを抱きしめたいと思ひました。けれども私はやつぱりそれを堪こらへました。あなたをして其處で思ふさま泣かせる事の出来ないのを口惜しく可哀さうに思ひながら、私はたゞ黙つて冷たく瀧たぎのやうに流れるものを拭ぬぐひもあへずに、あなたの袂たもとの先を掴んで、思ふさまそれを握りしめました。その袂を強

く引く事すらも敢てしなかつた私を、ハンカチでぴつたりと顔を押へてゐたあなたは恐らく今まで御存じがなかつたでせう、あなたが顔をあげた時には、みんなが吃驚びつくりしてこちらを振り向いてゐましたので、佐瀬家の親戚としては全く存在を認められない位の私が、こんなにも泣いてゐるといふ事を恥かしく隠すやうな氣持で下を向いてゐましたから。その時は私の持つて出たハンケチと鼻紙とは殆どもう用をなさなくなつてゐました。それで私は暗いところにいくと、頻しきりに顔を手で拂ひ指で拭ひしてゐました。

（四）

あなたに取つてこれはよい事と言ひ出したのかも知れませんが、けれども、何も彼も私に取つてはお名残りであるといふ事によつてどうか許して下さい。毎日かうして少しづつ／＼なけなしの精力を盡して書きつゞけますのも、残して行く人のた

めに残る思ひがそれをさせるのです。愚にも夫に先だゝれるものとばかり思つてゐた私が、二年とたゝ

ぬ間に思ひもしなかつたこんな病氣に罹つて、今は其命も消えゆく燈火の靜かなゆらぎをしてゐると

は、今更に寂しい微笑がこの色褪せた唇にのぼりま

す。可哀いさうなものは人間ですね、何にも知らないで、ほんとに何にも知らないであくせくと……け

れども、今はそれでいいのだといふ事がやうやくわかりかけました。自分の運命を知るやうになつてか

らはもうお終ひです、それを確實に知るやうになつては。今の私ですらも、まだくどうかすると萬一

を思ふ心があればこそ、かうして人間のお仲間入りをまだしてゐる譯なのでせうが、死ぬ事を知るので

はなくて、死そのものを——それこそあの捕捉すべからざるものを——しかと知り得る時には、人はも

うその死に融和し、合體し、いや／＼既に『死』そのものとなつてゐます。『死す』といふ事は何といふ

簡明な、それでゝ動かす事の出来ない、換りを用ゐる事の出来ない力でせう、間一髪を入れない、迅速な、明確な、嚴かな、極めて弱くて極めて強い力ではありませんか……『死す。』

死といふ事を無暗に問題にすると思はないで下さい、それを考へないではゐられないのだと思つて下さい、自分のためにも亦あの人のためにも。私自身についてはもうどうやら解決がついたと思つてゐます、それが間違つてゐるか間違つてゐないかは別問題として。たゞ私の無いあとのあの人のために私は今さまざまに思ひ圖つてゐます。恐らくこれは餘計な事でせう、來年の事を言つてすら鬼が笑ふと言ふのに、増して死にゆく者が、生き残る人の生活に干涉するなんて、ほんとに要らざるおせつかいです。ですけれども、さう思ひながらやつぱりいろいろな事を考へます。自分でもそれが空想で、決して事實はそんな風になつてゆくものではないといふ事

を百も承知しながら。ではそれは私の遊戯なのでせうか、いえ／＼決してさうではありません。たゞ私は、せめてはあの人の上に斯くあつて欲しいと思ふ事を思ふばかりなのです。それを願ひはするけれども、神様にだつて運命にだつてそれを請求しようとはさらさら思ひません。瞑するものはたゞ目をつぶりさへすればそれでいゝではないか、その黙従の外に私の爲すべきことはない筈と、頭ではよく心得てゐますもの。

けれども百合さん、其時が来るまでは、やつぱり哀れな人間の本性として、とやかくだらぬ思ひやりや思ひ過しをするものと見えます。氣にしないといひながら氣になるのですね、何だかあの人の姿が寂しさうです。春になつたらどうしよう、夏が來たらどうするだらう、秋が來たら冬になつたらと、些細な日常生活の事まで、自分がない後の事を氣にする私を笑はないで下さい。親が無くても子は育つ

といふ譬がある位なのに、殊に大の男一人を何と心得てゐるのだと人は笑ふかも知れませんが、けれども百合さん、どうかあなただけはそれを笑はないで下さいな。

つく／＼省かへりみれば、私はあの人にとつて決してよい妻ではありませんでした。それにも係らずあの方は當分寂しくなるでせう。幸か不幸か私達の間は一人の子供すらもなかつたので、あの方は全くのひとりぼっちとなります。自分が愛された事を信じて安らかに眠つてゆく事の出来る私は、死ぬといふ事が自分一人易やすきにつくやうで、何だかそれが心苦しくて仕方ありません。せめては私の亡い方が、あの方の生活にとつて藝術にとつて幸福であつてくれるやうに！ うでなかつたら、ではどうかよりよき者があの方のために與へられるやうに！ 私は少しも無理な心持ちなしにそれを願つてゐます。そして若しも死後生活に於てこの世の消息を知り得る事

が出来たならば、あの人がどんなに他の女を愛しようとも、それがあの人を慰め、又幸福にするのならば、私は喜んでその二人のために祈るでせう。

争ひも、嫉妬も、憎しみも、さうした陰^{かげ}なる醜い感情は、命に先立つてだん／＼私の肉體を離れつゝあります。すべてが私を見離して行く……たゞどうかこの愛だけは、最後までも、願はくばその骸^{むくろ}にまでも踏みとゞまつてくれ！

寂しい世ではありました。私に取つてそれは廿六年間、楽しい事も嬉しい事もすべてつきくるめて人世は寂しかつたと思ひます。私達は又貧しかつた。けれども燃えて盡きる事のない愛の焰でお互が温め合ひました。或時は濕^{しめ}り、或時は突風の危機に遇つて、僅かに消え残つた事もありますけれど、そしてそれを私達は最初極僅かしか持つてゐませんでしたけれど、いろ／＼な艱難や寂しい目に遇ふ度びに、だん／＼だん／＼焰^{ほのほ}は強められて行きました。

お互に援^{たす}けあひ暖めあはないで、どうしてこの惱みの多い世に満足して生きる事が出来ませう、それなのに今あの人はその伴侶を失はうとしてゐます。

《五》

あなたの籍もとう／＼^{もみやま}糸山にかへりましたのですつてね、勿論弘一さんを失つてからの佐瀬家に、あなたの執着はない筈ですけど、夫の姓を捨てる事の苦しさ寂さはどんなであつたらうかとお察してゐます。あの家は決して操正^{やもめ}しい寡婦のとゞまるに適當した家ではなかつたけれど、體は實家に寄せながらも佐瀬の姓をあなたは名乗る積りでゐらしたのにね、あなたの行末を思ふ伯母さんや從兄^{にい}さんの深慮は、既にあの不幸當時からその事を考へてゐらしたのでせう、いつぞや伯母さんが弘一さんのお墓の前でかう仰^{おつしや}言いました。『彼女^{あれ}がね、この石碑をたてる時に、どうしても自分の名前も一緒に刻

むのだと言ひ張つて聞かなかつたんですよ。ですけども純太郎がそれは斷じていけないってね、許しませんでしたけどもね……。』伯母さんも目にいっぱい涙を溜めてゐらしたつけ。

思ひのまゝにならぬのが世の中だとは言ひながら、よしない再縁のすゝめに困^{こづ}り果てゝ、獨立の道を密かに搜してゐるといつかのあなたのお手紙にありました、ほんとにあなたの運命もどうなるのでせう、まだ達者で元氣なお母さんと、立派な兄さんとを持ちながら、あなたもやつぱり寂しい人の一人ですねえ。到底自分には忘れる事の出来ぬ亡き人の思ひを抱いて、再び人に嫁がうとは思はないと仰言つてゐるあなたの心を私は嬉しく思つてゐます、けれどもそれは何といふ悲しく寂しい生涯でせう、あなたがその境涯に堪へ得るかどうかなどいふ事は決して問題にしないでも、私はあなたの再婚に就いて考へてみたいやうな氣がしてゐます。

若しもねえ百合さん、あなたが大事に／＼胸に抱いてゐるその思ひに、少しも手を加へる事をしないで、そしてその爲めにあなたの良心が責めらるゝ事なしに出来る結婚があるとしたら、それに就てはどうお思ひになりますか。勿論さうした場合は、やはり同じやうな心の状態にある人との間に於てのみ可能な事です……明敏なあなたは、もう既に私が何を言ひたいと思つてゐるのかお察しになつたでせうね、どうか惡く思はないで下さいな、そして願はくば死者の口に耳を寄せてものを聞かうとするやうな注意をもつて、この事を考へて下さいませんか、初めからそれが無理な事だとはわかつてゐても、無理は無理かも知れませんが、併しそれは理不盡な事でも、亦決して不自然な事でもないだらうと私には思はれるのです。運命の仕事には決して不自然といふ事はありません、假令不自然に見える事があつたとしても、よく／＼辿つてみれば、その不自

然らしく見えるのが却て最も自然な状態である場合がよくあります。

私は今運命といふ言葉を使ひました。さうした考

へが恰あたかも暗示のやうに私の脳裡を過ぎて行つたも

のですから……。けれどもこれを具體的な話にして

見た時に、何といふそれは突飛な思ひ付きでせう、

若しも伯母さんがこんな事をお聞きになつたら、呆

れてお了しまひになるどころか、必きつと『人を馬鹿にして

る！』とお腹立ちになるかも知れませんね、伯母さ

んは私達の貧乏を憐れんでは下すつたけれど、私達

を祝福し又あの人を認めては下さいませんでした。

あの人は全く社會的には地位もない財産もない、

たゞ一介の貧乏な繪かきに過ぎません。そして空し

き名聲は勿論の事、又その藝術に大天才の閃きを持

つてゐる譯でもありません。けれどもあの性格の中

に持つてゐる純眞なものが、やがてはその藝術を清

め、小さければ小さいだけの眞實を其處から見出し

得る事だらうと私は思つて居ます。そして人間としての生活を誰に憚るところもなく、又耻づる事もなく、靜かに寂しく生きて行く人です。體の方も私は反對にだん／＼だん／＼丈夫になつて行くやうです。私はそれを何より嬉しく、涙ぐましく見まもつてゐます。

けれどもかうした人が、あなたの行末を相當な富と地位とで固めようと心配してゐられる伯母さんや従兄さんに取つて、一顧の値もない事をよく承知してゐながら、そしてそれをちつとも無理だとは思はないで、猶且こんな考へをあなたに打明けるといふのは、私もよつぽど夢想家ですことね、たゞ小さい時から仲よしで、同い年のせいかよく氣があつて、大てい何事にも私に同意し又理解してくれたあなたを信じ、百合さんあなただからこそ安心してこんな取りとめもない事を書き置いて行くのですよ。私はあなたを自分の半身のやうに心得て、しかも私

の短所を補ふものをあなたがふんだんに持つてるだけに、そのよりよき半身に私はあの人を托して行きたいと、勝手な事を空想したのです。

若しもこの事があなたを侮辱する事に當つたらどうぞ堪忍して頂戴。私は決してこの事をあなたに強ひるのでもお願ひするのでもありません、たゞ若しもどうかした運命でそんな事にもなつたらばと、私の夢をお話してゐるところなのです。どうか責任をもつてこの手紙を讀まないで下さい。そしてあなたの自由意志をもつて、あなたのこの後の幸福に就いて敏感であつて下さい。

誰でもこの世に心強く生きるためには一つの慰めが必要な筈です、それは人によつてその求めるものが違ふ通りにその慰めも違ふでせうけれど、貧富を超越してお互に宥し合ひ援け合ふ愛の慰めこそは、一番揺ぎのない力だらうと私は信じてゐます。そして夫妻の結合が、お互に最初であり最後であら

れる人は何よりも幸福です、けれども大抵は皆その胸に一度半度の愛の負傷を受けてゐます、この事はどう思つても寂しい事ではありませんか、悲しきは誰しも遂にその運命に支配さるゝ人間であるよ！せめてはお互に何事をも容しあひ、慰めあうて、更に其處から生れて来る愛の泉でその傷を洗はなくては！

（六）

私の大好きな愛する従姉の百合さん、もう左様なにしませうね、どうか幸福で送つて下さいな、私が死んでもあんまり力を落さないで頂戴。あなたの純な心持ちをいつまでも失はないやうに祈ります。この手紙を見てしまつたら焼いて下さいね、あなたに打ち明けた私の心持ちは、あなたの自由を縛らないやうに、私自身片っぱしから忘れて行く事にしませう、大きなく忘却が来るその前に。

すべては導くものゝ掌にあるのだけれど、若しも

あなたを眞に幸福にする縁があつたなら、皆様の安

心のためにも再縁なすつた方がよくはないかと思ひます。今更情ない事をいふとお思ひかも知れないけれど、獨身で過さうといふ事があなたに取つて自然な安易な心持ちであるならば、寂しいといふ事を不幸のうちだとは思つてゐない私は、その心持ちを踏み躪にぢつてもおすゝめはしないけれど、若しも死者に對する感情とか義理とかいふものがそれを阻はむのだつたら、それは無益な事だといひたく思ひます。若しもあなたが死者から嘗て愛されてゐた事を信ずるならば、安心して幸福へと導く手に腕をまかせてよいと思ひます。死んでゆく者は、たゞ／＼我が愛する者のより多く幸福である事より外は思ひ残さないですから…。

書けば書くほど名残りが惜しくなつて來ます、胸がいつぱいになつて來ます…それでは左様なら！…………。

一九一六、十一月、澄子

【入力者注】

底本は総ルビですが、ルビは一部のみ残しました。

底本…「女學世界」第壹拾九卷第壹号

(大正八年一月一日發行)

入力…小林 徹

公開…令和七年九月六日

リンク…[水野仙子作品年譜](#)